「イラストレーター中村佑介氏に聞く！クリエイティブとの向き合い方」
開催レポート

開催日：2025 年 2 月 22 日
@K-MIX 本社多目的ホール space-K

■ワークショップの概要と目的

浜松市は、創造都市としての更なる飛躍のため、クリエイティブシティブースター事業を展開し、新たに創造的な活動を始める人材の継続的な創出を目指しています。

今回は、イラストレーターの中村佑介さんが自身のキャリアや創作に対する考え方について語りました。会場には、デザインやイラストに関心を持つたくさんの方が集まり、熱心に耳を傾けていました。司会の方とともに、参加者からの質問に答える形でトークが進められました。

■中村佑介さんとは？

中村佑介さんは、ASIAN KUNG-FU GENERATION の CD ジャケットや、小説「謎解きはディナーのあとで」の書籍カバーなど、数々の有名作品を手がける人気イラストレーターです。その作品は、緻密な描写と鮮やかな色彩で、見る人の心を惹きつけます。

■イラストレーターを目指したきっかけ

中村さんは、高校卒業後に大阪芸術大学に進学しましたが、最初からイラストレーターを目指していたわけではなかったそうです。

「もともとはゲームのキャラクターデザイナーや漫画家になりたかったんです。当時はインターネットも普及しておらず、目につく絵を描く職業といえばその 2 つくらいしか知りませんでした。」

しかし、大学でキャラクター制作をするうちに、巷にあふれる美少女キャラクター以外の、自分が感じたままのフラットな女性像を描きたいと考えるようになったといいます。

■イラストレーターとしての転機

大学 3 年生の頃、背景込みで魅力的に見せる絵に興味を持ち始めたという中村さん。しかし、キャラクターデザインの仕事では、背景なしでキャラクター単体を魅力的に見せる必要があり、大学の先生からは「そのままだとキャラクターデザイナーは難しいのでは？」と言われたこともあったそうです。

それでも、自分の描きたい絵を続けたところ、大学の展覧会で好評を得て、「もしかしたら、これを仕事にできるかもしれない」と思うようになったといいます。

大学卒業後は助手として働きながら、個展を開いたり、ホームページにイラストを載せたりしていました。その結果、少しずつ仕事が増え、ASIAN KUNG-FU GENERATION のジャケットイラストなどを手がけるようになり、イラストレーターとしての道が開けました。そして 2009 年に初の画集「Blue」を出版したとき、本格的に「イラストレーターです」と自覚するようになったといいます。

■将来を担う子供たちへ

また、中村さんは、将来を担う子供たち、その保護者に向けて、以下のようなメッセージを送りました。

- 「苦手」と思わせちゃった時点で、周りが期待を上げすぎちゃっている。
- 美術ってそもそも正解がひとつではないもの。
- 好きなものを描いていれば、だんだん「描くこと」自体が楽しくなってくる。
- 周りは「上手・下手」で評価しないこと。
- ちょっとしたことでもいいところ、成長した部分を見つけてあげると、自信がつく。
- 楽しむ環境をつくることが、美術の勉強には一番のサポートになる。

■参加者からの質問コーナー

会場からの質問コーナーでは、制作環境や創作活動の苦労、今後の目標など、多岐にわたる質問が寄せられました。中村さんは、一つ一つの質問に丁寧に答え、参加者との交流を深めていました。

質問１　普段制作されている時の環境について教えてください。音楽などを聞かれることはありますか？

回答　制作をしている際は、基本的に無音の環境で作業をすることが多いです。特に本の表紙を描く際には、その作品のストーリーを忘れないように、できる限り静かな環境を保つようにしています。物語の世界観をしっかりと感じ取りながら描くことが大切だと考えているため、余計な音が入ると集中力が削がれてしまうことがあります。CD ジャケットの制作時も同様で、他の音楽を聴いてしまうと、その音楽の影響を受けてしまうことがあるため、アイデアが固まるまではその音楽だけを聞きながら制作を進めます。一方で、色塗りの段階に入ると、比較的単純な作業になるため、ラジオを聞いたり、友人と話したりしながら進めることもあります。特に音楽に関しては、作業の性質によって適した環境が異なるため、創作の段

階ごとに音の有無を使い分けています。

質問 2　創作活動の中で苦しいと感じた経験はありますか？また、大きな挑戦や新しいことに取り組む際に恐れを感じることはありますか？

回答　基本的に創作活動をする中で、「苦しい」と感じることはあまりありません。自分のペースで仕事ができる環境が整っているため、一般的な会社勤めの方と比べると、自由度が高いと感じています。自分自身で仕事を選び、スケジュールを調整できるので、無理に描かされるようなこともなく、大きなストレスを感じることは少ないです。もちろん、締め切り前のプレッシャーや長時間の作業が続くこともありますが、それはどの仕事においても共通する部分だと思います。大きな挑戦については、社会的な規模の大小に対して特に興味がありません。仕事の規模の大きさよりも、長く安定してクオリティを保ち続けることのほうが重要だと考えているため、自分にとって最善の選択をしながら活動を続けています。

質問 3　絵を描く際、人物を先に描くのか、背景を先に描くのか、どちらの順序で進めますか？

回答　制作の順序はその時々で異なりますが、基本的には依頼内容によって決まることが多いです。特に、女性の人物をメインに描いてほしいという依頼が多いため、それを踏まえながら構成を考えています。ただし、単に人物だけを描けばよいというわけではなく、ストーリーや背景とのバランスを意識しながら、全体の構図を工夫することが重要だと考えています。例えば、人物が主役のイラストであっても、背景が物語を補完し、世界観を形成する重要な要素になることが多いです。そのため、人物だけでなく、背景も一体となるように設計し、どのように配置すれば自然に見えるのかを意識しながら制作を進めています。

質問者には、中村さんからステッカーやポストカードなどのプレゼントが贈られ、会場は和やかな雰囲気に包まれました。また、講演会中には、中村さんが実際に手掛けた作画が回覧されました。繊細なタッチで描かれた作品に、参加者か

らは感嘆の声が漏れ、中村さんの卓越した技術を目の当たりにする貴重な機会となりました。

■今後の思い

講演会の終盤、中村さんは今後の活動について、次のように述べていました。
「これからも皆さんに応援していただけるよう、誠実に活動を続けていくことを大切にしていきたいと考えています。過去に自分の作品を手に取ってくださった方々が、時間が経っても『この作品を持っていてよかった』と思えるような創作を続けることが目標です。そのためにも、常に自分を律し、より良い作品を生み出せるよう努力を重ねていきます。」

また、近年活発な SNS での活動についても、以下のように語っていました。
「SNS などを通じてさまざまな意見を求められることもありますが、自分の発言には十分に気をつけながらも、芯を持って活動を続けていきたいと考えています。何十年後も『中村佑介さんの講演会に行ったことがある』と誇りとまでは行かないまでも、恥ずかしくならせないように続けていきます。」
「そして、年齢を重ねても決して偉そうにならず、常に周囲との関係を大切にしながら、楽しんで創作活動を続けていくことを心がけていきます。これからも応援のほど、よろしくお願いいたします。」

■講演会を終えて

今回の講演会は、参加者の創作意欲を刺激する素晴らしい機会となりました。中村さんの言葉は、これからクリエイティブな活動を始めたいと考えている人にとって、大きな励みとなるでしょう。